

校長室だより～和光高校今昔 第14号 H26.8.8

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

吹奏楽部よ永遠なれ

平成26年7月30日、和光高校吹奏楽部が県吹奏楽コンクールに臨んだ。20人以内の演奏であるCの部、部員は11名であった。昔日を知るものに取り寂しさは免れないが、精一杯演奏する生徒の姿からはむしろ健気な逞しさすら感じる。新採用の千葉教諭に希望を託したい。

和光吹奏楽部の歴史は、昭和52年に平井正樹教諭（現兵庫県在住）の赴任から始まる。当時は合唱を中心とする音楽部と（クラシック）ギター部の2つのみが音楽系の部活動であり吹奏楽部は存在していなかった。この年の秋に中学校で吹奏楽を



行っていた生徒などを中心に楽器も練習場所もないまま同好会として発足し、部として認められたのは54年春のことであった。その間はギター部の活動終了を待って視聴覚室で夜遅くまで練習するなど、同好会の悲哀を味わいながらも楽しく充実していたと20周年記念誌で平井は述べている。

ようやく部に昇格した昭和54年には、第1回目となる定期演奏会を行い、初出場となる吹奏楽コンクールでは西部地区・第4部において「スラブ行進曲（チャイコフスキー作曲）」を演奏し第一位になるなどその活動は華々しく幕を開けた。その年以降、年々部員が増え、楽器も充実し実力も急激に伸びていった。昭和57年には、全国高校総合文化祭栃木大会に県代表として参加し、コンクールでは悲願の優秀賞受賞、アンサンブルコンテストでは県を通過し関東大会まで出場し、しかもサクソ6重奏が金賞を獲得するなど創部4年目のクラブとしては信じられないような躍進ぶりであった。この時期に部の中心として活躍していた藤本裕子さん（クラリネット・10期生（昭和56年入学）・現与野高校国語教諭）は次のように語ってくれた。

「平井先生から石井先生への過渡期を過ごした私たちは、苦勞したというよりもお二人から素晴らしい薫陶を授かりとてもラッキーだったと感じています。まだ完成されていなか

った吹奏楽部が、あっという間に県のトップとなる上昇の時期に籍を置けたことにも感謝しています。いつか再び顧問として和光吹奏楽部を支える日が訪れることを期待しています。」

この言葉のように、昭和58年からは、平井に代わり石井敬孝教諭が部を率いることとなった。まず石井の経歴を紹介するが、高校の教師としては信じられないようなキャリアである。氏は東京芸術大学音楽学部卒業、卒業と同時に同大学指揮科助手、翌年「東京吹奏楽団」に入団。また、ジャズドラマー猪俣猛氏の打楽器グループ「セパレーション」の



メンバーとして数々の演奏や録音を行っていたプロのミュージシャンなのであった。当時のジャズ雑誌の番付?でドラマー部門の上位にランクされていたという逸話もある。埼玉の教員としては、和光高校を振り出しに、大宮光陵高校音楽科、松伏高校音楽科で指導をされた後、埼玉県立総合教育センター主任指導主事兼教育主幹、幸手高校と芸術総合高校の校長を歴任するなど日本の音楽教育の第一人者として活躍

をされた。しかも、埼玉県吹奏楽連盟理事長や文部科学省教科用図書検定調査審議会臨時委員等なども務めていたのだ。後進の指導も含め埼玉いや日本の音楽教育にこれほど貢献された方はまずほとんどいらっしゃらないだろう。

この年(58年度)もコンクールとアンサンブルコンテストで前年と同じ成績を収め、顧問が変わるというショックを猛練習で払しょくした。60年の最優秀賞受賞(自由曲;天使ミカエルの嘆き(藤田玄播作曲)、課題曲;ポップステップマーチ(森田一浩作曲))などこれ以降の5年間は石井の指導により完全に強豪校の仲間入りを果たしたのである。ついでながら後年OBとして念願の関東大会金賞に導くこととなる押味剛(12期生)は、大宮日進中から石井の高名を慕って和光高校を受験した。押味は自分たちの代では果たせなかった夢を小高秀一教諭(後に所沢緑ヶ丘高校校長)の元で指揮者としてかなえた。平成3年、「ガイーヌより(ハチャトーリアン作曲)」で県最優秀賞をひっさげ関東大会で金賞を受賞した瞬間である。

現在の吹奏楽部は部員数も少なく、往年の猛練習も見られない。しかし校内でもっとも良い景色を望む音楽室で、音楽を愛する部員たちが一生懸命楽器に取り組む姿は変わらずに繋がっているのだ